

「淀川水系河川整備計画原案に関わる質問・意見に対する回答(一般)」に対する再質問・再意見。

2007年9月24日

自然愛・環境問題研究所 代表 浅野 隆彦

全般に渡って、質問・疑問の核心に対する真正面からの回答に成っていない。マトモに答えなければ、回答とは言えない。ここに改めて、マトモな回答を求めての再質問・再意見を行う。

最初の質問・意見、そして回答なるものは第 61 回委員会時(H19. 9. 19)配布の審議資料 1-2-2 中にあり、「番号」に対応して参照賜りたい。

番号=187

河川整備計画策定にあたっての基本的考え方が表明されているが、それは「20~30 年間の全ての整備内容を網羅的に盛り込んでいるものではなく、現時点で必要と考えるものを記述しており、社会状況の変化や新たな知見等による検討結果等をふまえて、整備内容を追加していくものとする。」「随時、進捗状況を点検して、必要に応じて見直しを行うものとする。」に集約されている。

ここには、却って「長期的視点で体系的に河川整備計画を考えることが出来ない」河川管理者の、「その場しのぎ」とも言える態度が見える。

例えば、ダムを整備するでしょう。この事でどれほどの自然環境破壊が起こり、巨額の税金が使われるか？「進捗状況を点検して、必要に応じて見直しを行う？」もう遅いのである。元のままの自然が蘇るために？！どれほどの時間が掛かると思っているのか？ダムを撤去するにも、又何 10 億と税金を追加しなければならない事を考えているのか？

改めてオーム返しではない、真摯な回答を返されたい。当初の質問の重い趣旨、哲学をよくよく吟味し、真正面からの回答を返して貰いたい。

番号=229

「ハザード・マップ」検討時の結果という事は分かったが、何故、「計画規模を大きく上回る降雨を想定したものを、「戦後最大洪水(枚方 1/60)に対応させようとする当面の河川整備計画原案の説明」中に含めるのか？特殊な意図を感じるが、あれを削除し、原案に対応した規模に基づいた降雨での検討の結果に改めるべきであるが、どうされるか？

番号=231

回答からは、特に遊水地の詳細が現時点では分かっていないのであるから、このハイドロ・グラフは示されないのではないかと暫定的な所見である、と断り書きを付けるべきではないか？

番号=232

川上ダムの諸元は原案 P.64に出ているが、それは貯留容量であり、「洪水調節量」ではない。この説明に使っているハイドロ・グラフが(5313 洪水)による「洪水調節量」を基にして出されたものであれば、詳しい流出解析(洪水追跡計算)を示して貰いたい、と言っているのである。

番号=233

回答では「別紙資料の通り」と書いているが、何の事だか分からない。ちゃんと『特定できる』表現が必要ではないか。川上ダム地点で800m³/S の調節効果があるというなら、その「検討調査報告書」と枚方地点までの「流出解析(洪水追跡計算書)」を示して貰いたい。

番号=234

「上下流・本支川間のバランスに基づく治水対策」と言っているが、「バランスの定義・基準」を具体的に記述して貰いたい。その上で、元々、自然が作った「狭窄部、洪水氾濫原(遊水地)」を改変して、下流に洪水負荷を増やす事が「上下流のバランスの為にどうしても必要不可欠の河川整備」であると考えているのかどうか？その論理を明確に示して貰いたい。尚、回答では下部の記述が欠けている。

番号=235

この質問では「淀川水系の基本高水選定」に際し、確率論に於ける初歩的誤認をもって、基礎的「確率・統計学」を誤って応用しているという致命的な欠陥を指摘し、質問と全面的・根本的な再検討を求めているのである。

まず、「確率論か確率・統計学」の学問的立場から、真正面からの説明・反証をされたい。「雨量確率から流量確率を求める事において、その条件付確率(複合確率)は、その2つの確率を乗法の定理により掛け合わせた数値となる。」のである。私の検証で、「流量データからのみの17,000m³/Sの基本高水」でさえ、1/4000の確率であることが判明している。ピーク流量群の最大値を「基本高水流量」と決定しているものは、1/10,000あたりになるのではと予測している現在なのである。